

△グエン・ドクさんとの再会は驚きから！

日越医療交流センター

望月 育郎

小雨の中、車から降りると、松葉杖を突いて、ピョンピョンと軽いタッチで水溜りを避けながら走られたのに、まず驚かされました。

ドクさんとの出会いは、1988年4月に遡ります。水俣病研究の第一人者である原田正純先生を団長とする「ベトナム枯葉剤被害視察団」として、ツーザー病院を訪問した時です。当時は、ベト・ドクちゃんの二重胎児で分離手術前でしたが、元気に遊び、話をされていたことが、鮮烈な印象として残っています。また、ツーザー病院内の資料室には、枯葉剤被害の結果、生まれることさえ出来なかった胎児が百数十体、ホルマリンに浸かって眠っていました。改めて、化学戦争の恐ろしさを実感しました。

病院内の見学では、こちらが気をきかせたつもりで車椅子を用意したのですが、「いらないです」といって、全館を松葉杖で歩かれました。ドクさんは、医事課のコンピューターシステムやカルテの保管・医事会計システム等を熱心に見ておられました。付添いの医師は、未熟児室や分娩室等、産婦人科、小児科を念入りに見学し質問されていました。

午後は、病院内保育所園児の歌や手遊びを楽しまれました。阪南中央病院職員や日越医療交流センター会員との交流では質問攻めに遭われ、「日本の食事をたべられますか？」の質問には、「何度も日本に来ていますので、お寿司・天ぷら等なんでも食べます」また、「将来何をされますか？」には、「ツーザー病院の事務員として、患者さんのために働きます」と決意を述べられました。

二重胎児として生まれ、現在も障害を持ちながら明るく元気に生活されている姿に感動し、励まされた一日でした。

